

健やかな成長を願って...



オレンジリボンには、子どもの虐待を防止するというメッセージがこめられています。

～助けての小さなサイン受けとめて～

元気な子どもたちの声が響き、活気に満ちたまちを望む気持ちに反し、年々児童虐待対応件数が増えています。11月は、児童虐待防止推進月間。子どもたちの健やかな成長のために、私たちにできることを考えてみましょう。

児童虐待ケースで見逃さないのは子育て不安

平成19年度の児童虐待対応について、全国の児童相談所が対応したのは4万618件(速報値)。島根県の市町村が対応したのは、281件で、そのうち出雲市は85件。いずれも前年度を大きく上回っています。

これら、支援が必要なケースについては、児童相談所や市をはじめ関係機関が連携し、子どもたちのよりよい養育環境を検討し対応しています。

虐待ケースの中で気になるのは、実母が加害者である事例が多いことです。その背景には、核家族化や少子化により、子育て不安を母親一人が抱えている実態が見逃せません。子育て中の若い世代の不安感を取り除くことが、虐待予防にもつながると、市では考えています。

地域の見守りの中で、母親が、孤立感の中で子育てをすることのないよう、市では、今年度から、あかちゃん声かけ訪問事業を行ってまいります。生後4ヶ月までの乳児がいる全家庭を訪問し、地域や子育て支援に関する情報提供を行うほか、困っていることや悩んでいることなどの話を聞き、地域全体の子育て意識を高めようとするものです。

昨年行った子育て中の家庭を対象とした市民アンケートでは、地域全体で子どもが育てられていると感じている人は、24%。一方、子どもたちが地域で生き生きと活動できる行事など、地域での触れ合いを望む声が、数多くありました。

虐待にはさまざまな理由が考えられますが、いざいざにしても、地域の見守りの中での子育ての必要性がうかがえます。子育て世代の支援者として、あなたも自分の立場でできることを考えてみませんか。

市の児童相談窓口は
少子対策課 ☎6604

子どもたちの



今年8月に行われたすくすくひろばの七夕まつりコンサート。地域の人たちや日ごろ参加しているメンバーの声がかけて、多くの参加があり、大好評でした



すくすくひろば
スタッフ
水上 郁子さん

大津地区の子育て支援の取り組み

「すくすくひろば」誕生から10年

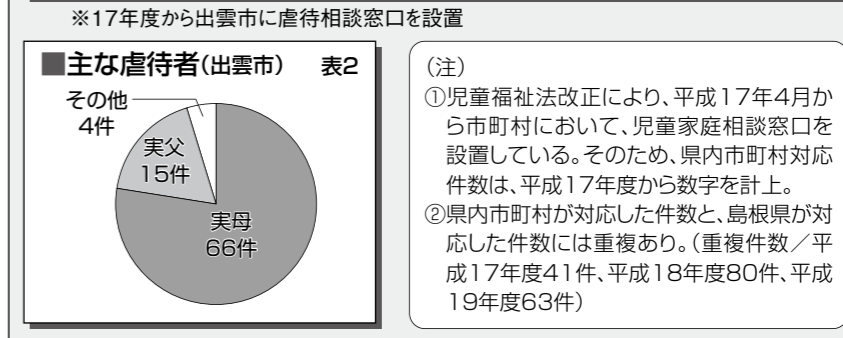
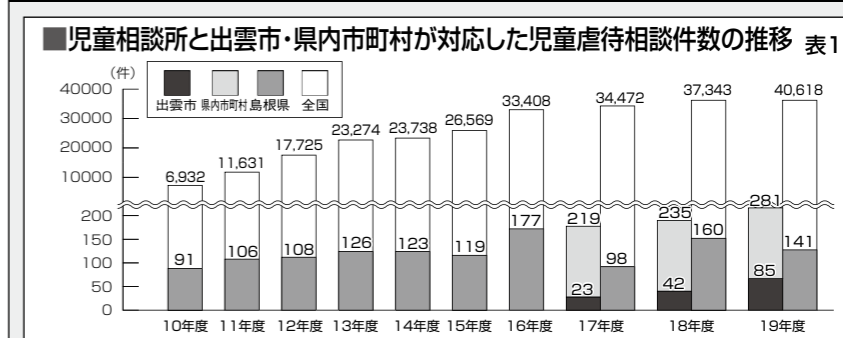
大津地区では、子育てしやすいまちづくりを目指し、民生委員児童委員協議会を中心に地域で子育て支援活動を展開しています。これら活動のひとつに、子育てサロン「すくすくひろば」があります。そのサロンの中心的役割を担っている水上郁子さんに話を聞きました。

『子ども同士で遊ばせたい』『育児について話し合いたい』『母親同士で友だちづくりをしたい』『遠慮なく遊べる場所がほしい』...そんな若いお母さん方の声を受け、10年ほど前、地域の有志の皆さんの協力体制のもと、子育てサロン「すくすくひろば」は誕生しました。

参加したい人は、他の地域の親子も大歓迎。毎月2〜3回、木曜日に自由遊びや団子づくり、健康教室や遠足などさまざまな企画で開催しています。参加自由ですので、気軽に出かけることができます。県外から嫁いで来た人からは、慣れない土地での不安いっばいの子育てが「すくすくひろば」に参加したおかげで、楽しいものになったとの声も寄せられました。

「すくすくひろば」のスタッフをはじめ、大津地域のいろいろな立場で子どもに関わる人々と子育てネットワークを構築するうちに、子育ては、子どもを取り巻く多くの人たちがつながっている必要があるのを感じるようになりました。子育て中のお母さんには、ひとりで悩んでいないで、自分自身は地域に守られているということを知ってほしいと思います。

平成19年度 児童虐待の現状



里親制度を知っていますか？

家庭の事情などで、親と暮らすことができない子どもを自分の家に迎え入れ、愛情を込めて養育しようとする人を里親と言います。現在、島根県内には、89組の里親登録があり、32人の子どもたちが、里親のもとで、生活しています(平成20年10月末現在)。あなたも里親登録をしませんか。関心のある方は、ぜひ出雲児童相談所にお電話ください(☎☎0007)。詳細をお話します。



長年、里親として子どもたちに関わってきた岸洋造さんから、自らの経験を踏まえた思いを聞きました。



島根県里親会出雲地区会長
岸 洋造さん(荒茅町在住)

初めて里親になったときのこととは、忘れることができません。二人の女の子が、我が家に来ってきたときの、愛に飢え、小さい胸を恐怖心でいっぱいにして震えていた光景は、今思い出しても涙が出ます。やがて私たちと信頼関係ができ、学校からも落ち着いてきたからもう大丈夫と言われたころ、彼女たちは、親元に帰らなければならなくなりました。その後どうしているのかわからず、18歳になるまで一緒に暮らし、幸せな行く末を見届けたかったという思いがいまだにあります。

子どもは日本の宝です。育つ環境の整っていないところで生きようとしている子どもたちを守るために、里親制度があります。里親に一番必要なことは、子どもに対する深い愛と熱意だと思っています。日本の将来を担う子どもたちのために、里親の登録をしていただける人が増えることを願っています。